

論文審査の結果要旨

論文題名：第1子が出生した夫婦に対する父親の抑うつ状態に焦点をあてた
予防的看護介入の効果の検討

申請者氏名： 櫻沢 亜希子

審査の所見

<論文課題概要>

本論文は、厚生労働省をはじめとした国の少子化対策の一環として、社会問題となっている産後うつや子どもの虐待の課題に対して、看護介入を行うことで予防につなげることに着目した非常に意義のある研究である、第1子が出生した夫婦の父親の抑うつ状態に焦点をあて、父親の体験と父親への看護介入の効果を二つの研究から明らかにした論文である。

<研究内容>

第一研究では、生後3~4か月の第1子の父親8名を対象にインタビューを行い、妻と関連する5カテゴリー、子どもと関連する2カテゴリー、父親自身に関連する2カテゴリー、家族に関連する1カテゴリーを抽出した。

第二研究では、父親の抑うつ状態を抑制することを目的とした動画を作成し、生後1か月時に動画配信を行う看護介入を49組の夫婦に行い、生後3~4か月時点での効果をコントロール群と比較検証した。出生時に抑うつ状態にある父親で介入により3~4か月時点の父親の抑うつ状態が抑制されたこと、また、父親において、出生時の夫婦関係満足度と自尊感情が低いほど、生後3~4か月時点での抑うつ状態が高値であることが示された。

<科学的到達・新規性>

審査では、第1子が重要である客観的根拠、論文中の「地域」の解釈、概念枠組みと仮設の説明、介入プログラムの作成手順、父親の基本情報を交絡因子としたときの解釈内容、サンプルサイズの設定根拠、介入動画の作成手順などについて質疑がなされ、いずれも妥当な回答が得られた。本研究は、第1子が出生した夫婦の父親に焦点をあてた新規性と、得られたエビデンスは科学的到達を担保する重要な知見を含んでおり、本研究の今後の展開によっては、我が国の保健医療福祉に貢献する可能性を有する論文であると考えられる。

<発展>

予防的看護介入の効果をより明らかにするためには、動画視聴をおこなう対照群を設けた検証を行うことで影響要因の明確化につながることを、プログラム評価におけるインパクト評価とプロセス評価から、より適切な指標となるインパクトを検討していただけることを提言した。

以上のことから、本論文は博士（健康科学）の学位授与に値するものとして認める。

【審査員】

主査： 埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科 教授 古谷 佳由理

副査： 埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科 教授 中谷 直樹

副査： 神奈川県立保健福祉大学保健福祉学研究科 教授 北岡 英子